

仁義なき派閥抗争？

読者は「リットル」！ 文章は読んでもらう「ナンボ

句読点のテンは、本来どこで打つべきか。

これまで感覚に頼ってきた部分を理解するには、

「日本語を外国語として考えると、ルールとして説明できる」と語る、日本語研究者の石黒圭さんに聞いた。

国立国語研究所教授

石黒 圭

●いしくろ・けい 1969年大阪府生まれ。国立国語研究所教授、一橋大学大学院連携教授。研究分野は日本語学・日本語教育学。近著に『語彙力を鍛える』（光文社新書）、『接続詞の技術』（実務教育出版）など。

考え方によって変わる句読点

句読点というと、テンとマルを指しますが、マルの句点はさほど問題になることはありません。迷うとしたら、カギカッコで文章が終わるときにどこへ句点を入れるか、ぐらいでしょうか。

「～でした」

「～でした。」
「～でした。」
「～でした。」

このように、句点を入れない人と、カギカッコを閉じる前に入れる人、閉じた後に入れる人、閉じる前と後の両方に入れる人で、意見は分かれます。

一九四六年に文部省（当時）教科書局調査課国語調査室で作成した

しょう。私は、読点をテーマに卒業論文を書いたのが研究生活の始まりでしたが、それ以降も読点の研究はあまり進んでおらず、学校教育でも

井上ひさし『私家版 日本語文法』（新潮社）から

句読点についても、漢字にたいする考え方と同じように、国論（とはすこし大袈裟であるが）は、真ッぱたつに分れてたがいに睨み合いを続けている。一方は「句読点は字と同じか、それ以上に重要」（本多勝一）である、とする人たちで、この派には国語学者やジャーナリストが多いようだ。学者やジャーナリストの仕事は、真理や事実をできるだけ客観的に、つまりわかりやすく読者に伝えることにある。そこで句点や読点の用法を研ぎ、磨きして正確に使い、すこしでも文章を明晰なものにしたいとつとめる。これはまことに正しい態度であると思われる。

他方に「句讀點と云ふものも宛て字や假名使ひと同じく、到底合理的には扱ひ切れない」（谷崎潤一郎）と考える人たちがいる。だから「符号といふのはあくまでも補助的なものだから、究極的に重大なのは、たとへ句読点をすべて取払つてもなほかつ一人立ちしてある頑丈な文章を書くことなのである。そしてこのことは、難事ではあるけれども不可能事ではない」（丸谷才一）と覚悟を定める。当然のことながら、この立場の人たちの多くは小説家である。秃筆を舐め舐め世渡りをしていく筆者には、この覚悟がいかに重大であるか理解できる。

はありますが、十分にはまとまっていけない感じがします。

プロの作家やジャーナリスト、日本語研究者など、立場によってもの見方が違うので、使い方にもばらつきがあります。このことを作家の井上ひさしさんが明確に述べている文章があります（上段の囲み参照）。

井上さんは小説家ですから後者の立場、私は日本語研究者ですから前者の立場に立ちます。現在の書き言葉の状況を考えると、文章をわかりやすく読者に伝えるための客観的な読点のルールを統一的な基準として立てるのは難しいでしょうし、私人が「こうしましょう」と提言しても、世の中がそうなると思いません。

しかし、せっかくの機会なので、気づかないで使っている読点の用法について、いま一度整理をしてみようと思います。